



(図1) 藤井達吉「土星」
(1953 年頃、紙本着色、金箔、個人蔵 (碧南市藤井達吉現代美術館寄託))

はじめに

一九五三年頃藤井達吉(一八八一―一九六四)が制作した「土星」(図1)は、藤井達吉晩年の作品として知られている。縦に長い画面のほぼ中央に土星が佇み、周りには星が広がる様子が描かれている。周りの星は土星とともに金箔を用いて表現され、背景は宇宙のような、夜空のような空間を微妙に濃淡を変化させて表現されている。土星というものを正面から捉えたため、題材や構図が明瞭であり、また技法的にも力の入った、優れた絵画作品である。

一つのジャンルにとどまらない、多彩な作品を残した藤井だが、晩年にはこれまでの自然の景物・事象を描いた作品に加え、自身の目指した「総合芸術」のひとつの到達点ともいえる、絵画や工芸、書や歌などを一つの作品に組み合わせた継色紙、あるいは漆や渇墨による山水図などを多く描いた。本作はそうした晩年の画業の中でも土星という珍しい題材を選択している。技法的に力の入った、優れた絵画作品であることからスケッチや単純な観察の記録ではないだろう。また、描かれた一九五三年頃には土星に関する大きなニュースは見られない。ということはこの作品には藤井にとって何か大切な意図や思想が込められているのではないだろうか。本稿では藤井の画業の中で、この作品がどのような意義を持っているのか考察したい。

まずは本作について、言及されている事柄を確認しておこう。藤井達吉の画業の中で、土星を取り上げた作品は、本作を含め現在までに2点確認されている。太陽、月、あるいは山など特定の題材を繰り返し描いた藤井の作例の中では、少ない部類に入るだろう。

藤井は一九三五年にはじめて四国遍路に行き、一九六四年に亡くなるまで六回ほど遍路の旅に出かけている。この旅をとおして藤井の絵画は、「祈り」(一九三五―一九四五年代・碧南市藤井達吉現代美術館蔵)や「斑鳩の里」(一九五五年代・個人蔵)、「夕映」(制作年不詳・個人蔵)のように視線が直線的に天空へ向かう傾向が強くなる。そしてこの傾向の中でも「土星」はそれらから一段レベルの異なるものであること、藤井が反産業、反近代を主張した社会思想、美術評論家であるジョン・ラスキン(John Ruskin)(一八一九―一九〇〇)が「地上にある彩は総て天上にあり」と語ったことを例に挙げ、まさに作者の突き抜けた発想力を思わせる、などの指摘がなされている。

天体モチーフの作品と言説

さて、本作について考察するために、まず同じく天にある景物を取り上げた作品について考えたい。藤井は日(太陽)や月、星といったモチーフをしばしば取り上げている。例えば、「日月屏風」(一九四一年頃・碧南市藤井達吉現代美術館蔵)は左隻に海上の太陽を、右隻には同じく海上の月を描いた二曲一双の屏風作品である。そして日月一組としたものだけでなく、「旭日瑞雲・不盡迎陽」(一九四二年頃か・碧南市藤井達吉現代美術館蔵)のように海に昇る輝かしい日の出と朝日を浴びる富士が象徴的に描かれた六曲一双の屏風や初冬の薄野に浮かぶ月を印象的に描いた「冬月」(昭和初期・碧南市藤井達吉現代美術館蔵)など、太陽、月とその情景を描いている作品も多い。また「梅百題」(一九六二年・愛知県美術館蔵)は梅の旅の思い出を歌と絵で表した、一〇二幅の軸からなる藤井晩年の代表作の一つであるが、ここでも絵や歌に月を取り上げている。このように歌の題材として取り上げたもののほかに、日(太陽)や月の情景を素早い筆致によつてとらえた作例なども見られ、藤井が太陽や月を繰り返し描いていたことがわかる。当館は九〇〇点近くの藤井作品、資料を所蔵している(二〇二〇年九月現在)。そのうち絵画作品は六く七割程度であるが、太陽や月を題材とした作例をいくつも見るができる。

加えて、藤井やその周辺の言説から、彼の日、月というモチーフへの思い入れを窺い知ることができる。例えば、日について、「私はよく日の出の絵を描くといわれるが、こゝから毎日日の出を眺めていると、一日として同じ模様の日がない。一日一日がそれぞれ違った日の出である。」と語っている。また藤井の日の観察、制作の様子が以下のように伝えられている。

(前略) 昭和十年ごろから十年以上日の出の研究に没頭されました。毎朝、その日の天気をたしかめると、晴天であれば必ず東の窓を開いて朝陽を写生された。この写生中は、まさに一心不乱、万一家人が声でもかけてこれを見だせば、たちまち筆でも皿でもほうりつけるという有様です。画境至れば、朝食も昼食もないという状態で、描き上げて意に満てばよし、もし意に満たないときは、直ちにこれを塗りつぶして捨てるという仕事を、毎日つづけられました。家人は、毎朝ひそかに抜き足さし足戦々兢兢と先生の仕事を乱さないようにつとめているというありさまでした。

以上のことから、藤井の日(太陽)に対する観察、研究への意欲、熱意が想像できるだろう。この藤井の真鶴における日の出研究のきっかけとなったのは、昭和天皇第一皇女・照宮成子内親王御成婚の折に、屏風と手筈の制作の依頼があったこと、そして洋画家、藤島武二(一八六七―一九四三)が作品を納めた際、その日の出の研究に七年海

岸で写生を続けたことによるという。こうした日の出の観察と写生を続けた成果が「日月屏風」や「旭日瑞雲・不盡迎陽」、そして一九四三年に献納した六曲一双屏風に表れているのだろう。

また先ほど挙げた「梅百題」の後書きには、「故知らに 月と恋いにつつ 幼きより 老いぬまで よくも語り来つるものかな 旅にあれ 患うにあれ 月と梅のみ恋いにつつ 生き来し吾よ おおさだめかや 月と梅 月よ梅梅」と梅に加えて月への愛着が同時に述べられている。¹⁰⁾

これらのエピソードから、藤井が太陽というものの観察や写生に重きを置いていたこと、そして太陽や月といった画題を好んで描いていたことが分かるだろう。

では、これに対して土星はどうか。先ほども述べたが、土星を取り上げた作品は2点であり、何度も繰り返し描いた日・月とは大きく異なる。また土星への言説もそれほど多くはないようだ。その一方で藤井は宇宙、星をしばしば話題に挙げている。

世間がどうあらうと、想方に大したことはない。星の世界への言葉ではないが、今われわれのかうした悲しみは、このわれわれには大きいかは知らないが、星の世界から見たら又宇宙から見たら、あまりに普通なことだ。あまりにあり勝ちなことである。私の生死が何の分厘のひびきにも価ひするものか。おおいやだ。価値を考へたくない。ただ自分の描きたいだけを描けばよいのだ。思ふままに描きたい。がそれを許されて居らない現状であるだけ、なほそれに行き度いのだ。悪口も雑言もほめるも、それはその人の勝手だ。私は私の行くままに行き度いのだ。良心の許す限りのほどに。ああ切ないことである。だが仕方ない。¹¹⁾

藤井は自身やその周りの環境を俯瞰的に見て、自身に対し宇宙、星を大きなものと捉えていた。またここだけではなく、そのほかにも自作の詩に人、地球、星を取り上げ、地上にいる自身に比較して自然の大きさ、偉大さを語っている。藤井は草花など身近な自然の姿を描く一方で、山や太陽、月などのスケールの大きな自然の姿を描いている。もちろんこれらは多くの先人によって古来より描かれてきた題材であるが、遠く山並みを見渡すような視点や広い空間に構える大きな太陽の姿、天へと視線が向かう、縦に伸びる構図など、藤井の眼、感性を通して構成され、描かれている。藤井は身近な自然とスケールの大きな自然の姿を表現していた。遥か遠く宇宙に佇む土星はまさに大きな自然の姿を表現しているといえるだろう。ここから自然を伝統的な花鳥風月としてだけではなく、広く深い、包容力の大きなものとしていた藤井の考えを窺い知ることができるだろう。

これらを踏まえると、画面に描かれた土星は、藤井の考える広く深い、包容力の大きな自然の姿を示している、と

捉えることができるかもしれない。作品への力の入れ具合、出来栄えは先ほど挙げた日・月を題材とした力作たちに肩を並べるものだ。加えて藤井の言説からも明確な意図があることは明らかだろう。土星というものの意味は日(太陽)・月とは異なる。天体というくくりは同じであっても、一般的に日(太陽)は日本の象徴として、月は日本の美、美意識を表現するものの一つとして描かれることが多い。対してここで藤井の土星が持つ意味とは何か。一つは今まで描かれなかったモチーフを描く革新性があるだろう。さらに土星は、数ある惑星の中でも輪という唯一の特徴を持つ。太陽や月よりも遥か遠くを見据える俯瞰的な視点と地上の自身と比較し、広く深い、包容力のある大きな自然を示すモチーフとして合致しているだろう。藤井は自身の自然観を宇宙に浮かぶ土星の姿に重ねて描き出し、表現したのではないだろうか。

「土星」の観察

さてここまで藤井達吉の作品、言説から「土星」という作品の意義について考えてきた。この作品が藤井の自然観を示している、として見た時、一つの疑問が出てくる。それは作者が自身の画業の中でも珍しいこの「土星」をどのようにして描いたのか、ということだ。作品をよく見ると、土星表面の模様まで描写がされている。特に一九三三年に観測され、取り上げられた土星表面の白紋と思われる部分(図2)も表現されていることから一九三三年の、あるいはそれ以降の写真や実物を見たことが考えられる。さらに先ほど述べたように、常日頃から観察・写生を重んじ、日の出を研究するために真鶴まで行き、写生を続けたという藤井が、単純に写真や想像のみで描いたとは考えにくい。藤井が土星というモチーフを実際に観察することができたのか、その可能性を考えてみたい。土星を目にしようとするなら、望遠鏡を使用するのが一般的だろう。藤井の生きた時代に、一般の人は望遠鏡を使用することができたのだろうか。

日本に望遠鏡が伝来したという最初の記録は一六一三年に遡る。駿府隠居中の徳川家康をめぐる政治情勢を記した日記である『駿府記』の慶長一八年八月三日の欄に「イグレス今日候殿中、：長さ一問程之鬚鬚六里見之云々」¹³⁾とある。この記録はイギリス東インド会社貿易船隊司令官であったジョン・セーリス(John Sars) (一五七九／一五八〇―一六四三) が執筆した『日本渡航記』の記録と一致している。ここには献上品の中に銀の台座に金で装飾した望遠鏡が含まれていることが記載されている¹⁴⁾。その後、海外から輸入されるようになり、のちに日本でも作られるようになったようだ。中でも岩橋善兵衛(一七五六―一八一)は望遠鏡製作と販売を行ったことで知られている。明治に至るまで四代に渡り望遠鏡を製作し、各地に岩橋製の望遠鏡が伝わっているという。¹⁶⁾当時、専門の学者たちだけでなく、民間においても望遠鏡制作が行われたことを知ることができる例だろう。



(図2) 藤井達吉「土星」(部分)

明治になると西洋の学問、技術を積極的に学ぶ動きがより活発になる。天文学についても同様で、江戸時代からの教育制度を大きく変革し、外国人教師を雇い、新たに天文台を設置するなど、教育、研究に向け動いていた。

しかし教育、研究に向けた動きは活発であったが、望遠鏡の生産、輸入ともに、世間一般に流通した数はそれほど多くはなかったようだ。一八七一年から一九六〇年までの様々な商品の生産、輸入、輸出量をまとめた『商品生産輸出入物量累年統計表』には望遠鏡の数も記載されている。明治期の生産量、輸出量は残念ながら掲載されていないが、大まかな輸入量を知ることができる。一八七一年から八四年までは一〇〇〇個未満であった輸入数が八五年からは一〇〇〇を超え、明治後半になると一〇〇〇〇個以上輸入されていることが分かる。¹⁷ただここでは天体望遠鏡だけでなく、双眼鏡やオペラグラス等も含まれているため、天体望遠鏡の正確な数は知ることができない。天体望遠鏡に限るのであれば、流通した数はより少なくなるだろう。このころはほとんどが輸入であり、一般への普及率は高くなかったことがわかる。

大正、昭和と時代が進むとその状況は大きく変わる。国産の望遠鏡を作るようになったことで、生産量が多くなり、輸入量が少なくなった。先ほど挙げた『商品生産輸出入物量累年統計表』を見ると、一九一二年時点で輸入量が二〇〇〇であったのに対し、生産量が一〇〇〇〇（推定）¹⁸となっている。そしてここから大正期を通して、多少の減少期はあるものの徐々に生産数を増やしている。

昭和になると生産量はさらに大きく増加する。一九三一年には約四一〇〇〇〇個、一九三五年には約八四〇〇〇〇個に上り、望遠鏡の生産は一つのピークを迎えている。¹⁹この時期は国内の企業が望遠鏡の生産を行っていた。例えば、日本光学工業（現Zeiss）では、一九二一年頃には、口径五センチから一〇センチ級の望遠鏡が一般に市販された。また一九四六年から一九五〇年にかけて、アマチュア、教育用に天体望遠鏡が相当数制作されたという。²⁰また、一九二六年に設立された五藤光学研究所では、普及価格の望遠鏡の広告を科学雑誌『科学画報』に掲載し、一九二七年より販売を開始している。²¹一九二〇年代に生産販売を開始したこれらの企業が順調に業績を伸ばした結果だろう。

その後、第二次世界大戦等により生産量は落ち込むが、戦後に再びその数は増加していく。藤井が「土星」を描いた一九五三年頃には六〇〇〇〇〇個前後の望遠鏡が生産されるようになった。²²

またこうした望遠鏡国産化の動きは東亜天文学会が発行した会報『天界』に掲載される望遠鏡の広告からも窺い知ることができる。東亜天文学会は天文に関する知識の普及という趣旨のもと、一九二〇年に「天文同好会」として創立され、学者だけでなく多くの天文愛好家で構成されていた。発刊当初からしばらくはイギリス、ドイツなどの海外製望遠鏡の輸入販売の広告、あるいは国内の企業による輸入販売広告のみであったが、一九二〇年代からその様子は変化している。一九二六年十二月号には西村製作所による望遠鏡の広告が掲載されるようになるほか、一九三二年、

一九三二年の一二九号、一三三号と後藤光学研究所から望遠鏡の広告が掲載されている。

以上のことから、一九二〇年代以降、国産の望遠鏡が流通するようになり、一般でも望遠鏡を購入できるような状況が作られていったと考えられる。藤井が「土星」を制作した一九五三年頃よりも以前に、すでに望遠鏡が流通していた。ここから藤井が土星を実際に観察することができる状況にあったといえるだろう。

藤井は観察を重んじ同じ画題を繰り返し描いた。しかし鋭い自然観察によって身近な自然を描き、四国遍路に自然と自己との対照と対話を求めている藤井にとって望遠鏡を通してみる土星の姿はあまりにも遠かったのだろう。同じ天体モチーフでもある日（太陽）や月に比べ、非常に作例が少ない。日（太陽）や月は日本の美術的になじみが深いモチーフであるだけでなく、日常的に見ることができののに対し、土星は肉眼でその姿を捉えるには遠く、望遠鏡を通さなければならぬ。広く深い包容力のある自然の姿を示すために、宇宙という遙か遠い空間への視点、土星はその象徴として適していたが、一方で藤井が重要視した観察が常に行えるほど身近ではなかったのだろう。もちろん、自身の好んだ題材であること、献納するために研究を重ねた事も大きな要因であろうが、土星という作例が少ないのは、毎日その目で見て、観察、写生ができるものではなかったこともあるのかもしれない。

おわりに

本稿では、藤井達吉作「土星」について、作者の言説や作品から、本作がどのような意義を持っているのかを考察した。また制作にあたり観察を重んじていた藤井が、実物を観察することができたのか、その可能性について言及した。藤井は宇宙に佇む土星の姿を正面から捉えて観察し描いたのだろう。一見題材の珍しさや藤井の発想力と革新性、あるいは他の作品に比べた異質さにのみ目が行ってしまう。しかしそれだけでなく、「土星」という作品は広く深い、包容力の大きな自然という藤井達吉の自然観や観察を重んじた美術観が端的に示された作品だといえるのではないだろうか。

（註）

- 1 碧南市藤井達吉現代美術館「画家としての藤井達吉―創作の原点を求めて―」二〇〇九年 八一頁
- 2 このことについては、碧南市藤井達吉現代美術館「画家としての藤井達吉―創作の原点を求めて―」二〇〇九年、株式会社キュレイターズ『藤井達吉の全貌―野に咲く工芸・宙を見る絵画』二〇一三年、などでたびたび指摘されている。
- 3 株式会社キュレイターズ『藤井達吉の全貌―野に咲く工芸・宙を見る絵画』二〇一三年、一五八頁
- 4 藤井達吉『美術工芸の手ほどき』一九三〇年、博文館、二二頁、このほかにも、藤井はラスキンを例に出し、語っている。反近代を謳ったラスキンの思想は藤井にとって影響するものが多分にあったのかもしれない。
- 5 前掲註3、一五八頁
- 6 松尾信實編『孤高の芸術家 藤井達吉翁』一九六五年、二五〇頁

- 7 前掲註6、二三三頁
- 8 前掲註6、二三三頁
- 9 藤井がこのとき献納した「桜に富士の屏風」の所在は現在不明であり、戦災などによって消失したものと考えられている。しかしながら、この作品の下絵である「出現」（一九四二年・愛知県美術館蔵）が現存しており、「桜に富士の屏風」の姿を想像することができる。
- 10 「梅百題」の解説については土生和彦「藤井達吉《梅百題》解題」『碧南市藤井達吉現代美術館年報 平成22・23年度／研究紀要 No.2』二〇一三年、を参考にした。
- 11 前掲註6、一七五頁
- 12 一九三三年の八月三日にドイツ、イギリスなど各地で観測された。日本では九月二日に宮本正太郎が確認している。一九三三年の『天界』一五〇号には「白紋は一つでは無く、少なくとも二つ三つの大小白紋が真珠の玉を並べた如く美しく並列し、輝やきは頗る強い」とその様子が記載されている。二つ三つの大小白紋が並ぶ、という記載からも、藤井がこの時の土星の様子を意識した可能性が考えられる。
- 13 『史籍雑纂』2巻、一九一一年～二二年、国書刊行会、二四四頁
- 14 ジョン・セーリス『日本渡航記』一九四四年、十一組出版部、一四六頁に「銀臺鍍金の筒入り望遠鏡一個」とある
- 15 ヴォルフガング・ミヒェル「江戸初期の光学製品輸入について」『洋学』第12号、岩田書院、二〇〇三年には、一六四〇年から一六七六年にかけて、オランダ東インド会社経由で限られた注文主を相手に少なくとも一六九本輸入されていたことが、永積洋子編『唐船輸出入品数量一覧』1637年・1833年・復元唐船貨物改帳・帰帆仁荷物買渡帳』創文社、一九八七年、には断片的ではあるが日中貿易資料から一七五六年に一〇〇本の望遠鏡が輸入されたことが指摘されている。
- 16 この点は中村士『東洋天文学史』二〇一四年、丸善出版、などで指摘されている。
- 17 島野隆夫『商品生産輸出入物量累年統計表』一九八五年、有恒書院、五八五頁
- 18 前掲註17、五八五頁
- 19 前掲註17、五八五頁
- 20 50年史編集専門委員会編『50年の歩み』一九六七年、日本光学工業、一六五頁
- 21 『科学画報』十一月号、一九二六年、誠文堂新光社、『科学画報』一月号、一九二七年、誠文堂新光社
- 22 前掲註17、五八五頁

（付記） 本稿を成すにあたり、所蔵者の方から格別のご配慮を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。